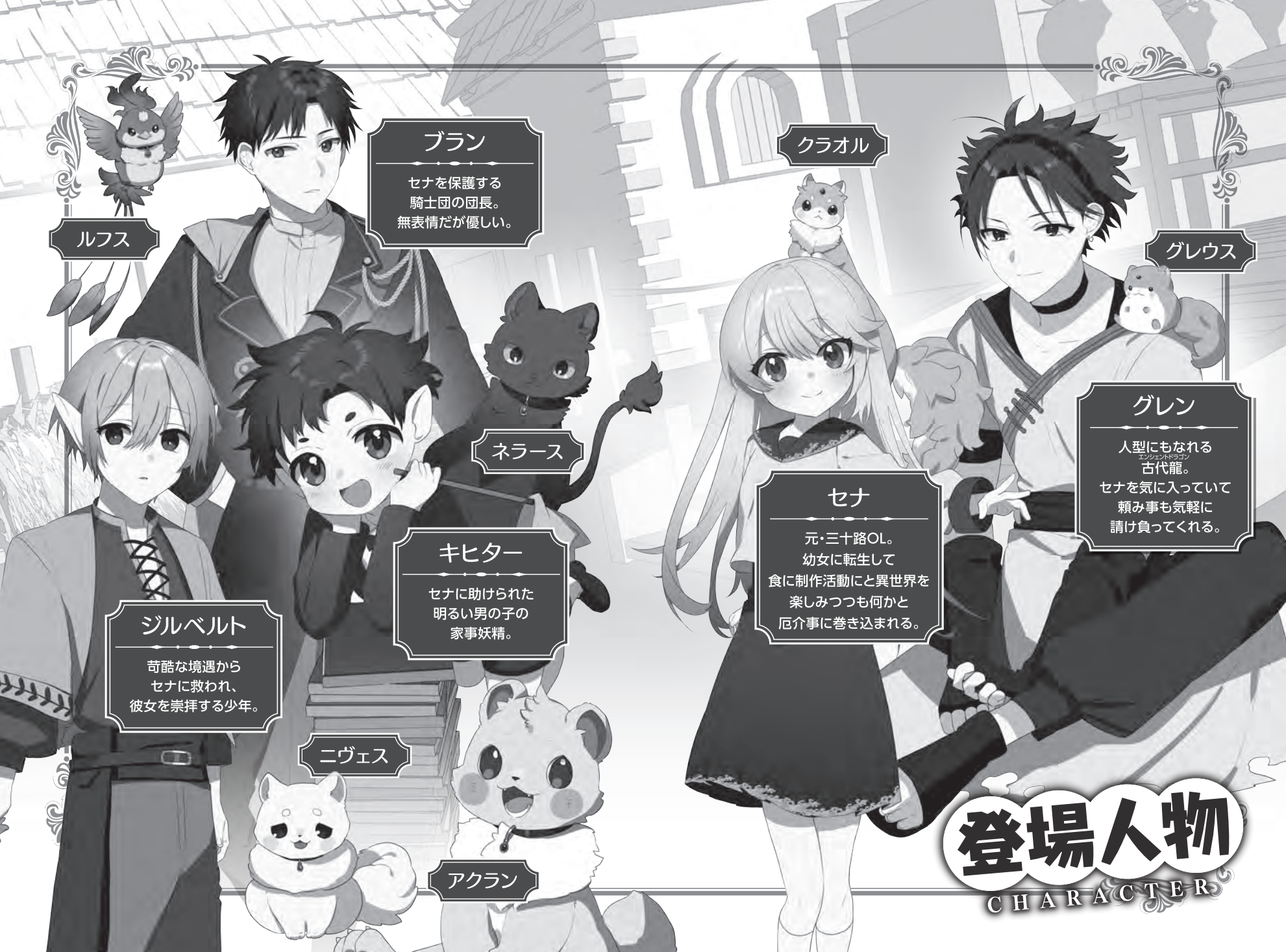
転生幼女はお詫びチートで異世界ごーいんぐまいうぇい

Going My Way

高木 コン

Kon Takagi

5


登場人物
CHARACTER
ルフス
ブラン
セナを保護する
騎士団の団長。
無表情だが優しい。
ネラース
キヒター
セナに助けられた
明るい男の子の
家事妖精。
ジルベルト
苛酷な境遇から
セナに救われ、
彼女を崇拝する少年。
ニヴェス
アクラン
クラオル
セナ
元・三十路OL。
幼女に転生して
食に制作活動にと異世界を
楽しみつつも何かと
厄介事に巻き込まれる。
グレウス
グレン
人型にもなれる
古代龍(エンシェントドラゴン)。
セナを気に入っていて
頼み事も気軽に
請け負ってくれる。

第0話　これまでの話

ラノベあるあるネタのトラ転……ではなく、〝神様のミス〟で異世界へと転生することになった私は、その記憶を失い、森の中で目を覚ました。危険なモンスターが蔓延る森の中を、後に従魔契約することになるクラオルと一緒に彷徨い……運よく【黒煙】という冒険者パーティに助けられた。勃発したトラブルで【黒煙】のみんなとは離れ離れとなり、キアーロ国――カリダの街にある騎士団に身を寄せることに。記憶も取り戻し、何故か私に甘い神様達を今ではエアリルパパ、アクエスパパ、イグ姐、ガイ兄と呼んで、可愛がってもらっている。

心配性なブラン団長達の希望と、「まずはこの世界に慣れるべき」とのパパ達の助言に従い、カリダの街で気ままに冒険者生活を送っていた私。そこで天災級の魔獣を倒したことと、古代龍のグレンと契約したことで国王から呼び出しをくらうハメになった。

私を利用する気満々の国王と交渉し、自由を確保できたまではよかったのに、宿のお部屋が荒らされてお城で寝泊まりしなきゃいけなくなったり、お世話になった服屋さんで問題が起きたり、脅されていた付き人に命を狙われていたり……

犯罪者として処刑されることになった付き人――トリスタン君を助けるため、隣国シュグタイル

ハンの国王――アーロンさんも巻き込んだ交渉にて、勝利を勝ち取ったところである。

第一話　救われた者の望み

キアーロ国の王――マルフト陛下との交渉の場だった応接室を後にした私達は、宛がわれている部屋へと戻ってきた。ソファに座ってから、先ほど髪を切ったトリスタン君……じゃなくてジルベルト君か。別人として生きるため、改名した彼の毛の束を握ったままなことに気が付いた。

「あぁ、これ忘れてたや。どうしよう？」

《髪の毛には魔力が籠もっているから、捨てることは推奨しない。呪いなどにも使われるからな。主（あるじ）は魔道具も作るから活用できると思うし、持っていて損はないと思うぞ》

私の呟きに反応してくれたのは青い精霊のエルミスだ。呪いなんて聞いちゃったら捨てられないじゃないか。一本残らず無限収納（インベントリ）へ収納しておく。

「トリスタン……いや、ジルベルト君だ。髪の毛をどうするかはジルベルト君本人に聞いてから決めよう。それにしても簡単に許可が下りたねぇ。もっとごねられるかと思ってた」

『主様が前に怒ったのが効いたんじゃない？』

「それも国の代表としてはどうなんだろう……」

『主様。今日この後はどうするの？』

「うーん、どうしようか？　夜ご飯までは時間があるよねぇ……ちゃちゃっと魔道具作っちゃおうかな？」

クラオルとグレウスのモフモフが疲れた心に効く。今日も素晴らしいモフモフである。

『王都に来てからご飯作ったり、いろいろと調べたりして忙しいから休んでほしいわ』

「そうだねぇ。ちょっと疲れたから甘いものでも……そうだ、シャーベット食べよ？」

『さっき言ってたやつよね？』

「うん。食べてみたらわかるよ」

王都に来る馬車の中で作っておいたシャーベットをみんなに配る。疲れたときに甘いものが食べたくなるのはなんでだろうね？

「美味し～。生き返るねぇ」

『んん！　冷たくて美味しいわ！』

みんなニコニコでパクパク食べている中、グレンが〈クッ！〉と顔を顰（しか）めてこめかみを押さえた。

「グレン、もしかして……キーンってなった？」

〈うむ……〉

「ふふっ。急いで食べるとなるんだよ。焦らないで食べたら大丈夫だから」

〈わかった〉

頭痛が治まったグレンはゆっくりと食べるのを再開し、グレンを見ていた他のメンバーもみんなゆっくりしたペースに変えている。この世界でも頭キーンは嫌がられるのね。

食べ終わった後は幻影の魔道具作りのため、精霊三人にお願いして調べてもらったり、精霊の子達に調べてもらったり。知識の準備が整ってからコテージへと移動した。

精霊三人の協力の下、魔道具の核となる魔石に魔力を込める。この魔道具でジルベルト君の処刑の様子を映し、彼が死んだと貴族達に思い込ませるのだ。私の想像力が成功の鍵を握るため、責任は重大。リアリティが出るように具体的に想像を膨らませていく。処刑というからには血や内臓なども出さなきゃいけない。魔物との戦闘経験があってよかったし、日本で楽しんでいた映画やゲームがものすごく参考になった。

集中して魔力を込め、おそらく核はできた。あとは精霊の子達が仕上げの部品を付けてくれる予定になっている。

スプラッタな光景を詳細に想像したせいで、私は気持ちが悪い。ガイ兄が危惧していた通り、これを謁見の間に集まった貴族全員に発動することになったら、魔力消費と内容が相まって確実にグロッキーになるに違いない。ウェヌスには「精霊の子に頼むとき、魔石に込めた魔力が一定の量で出続けるように作ってほしい。あと、再生と停止ができて、壊れたように見せる仕掛けを作ってもらえると助かる」と伝言を託した。精霊の子達で作れなかったら……なんとか自分で作るしかない。ぜひとも成功してほしい。

ウェヌスとプルトンは私からパンと魔石を受け取るとすぐに精霊の国に行き、魔道具作りが得意な子達に渡してくれた。戻ってきたウェヌスによると、プルトンが残って監修してくれるとのこと。

魔道具の核が作り終わってもまだ寝るには早い。思っていたよりもスピーディーに核を作り終えていたらしい。みんなに自由にしていいと伝えると、クラオルとグレウス以外はどこかへ遊びに行った。

簡単な夕食を作り、お風呂に入った私はソファに座ってクラオルとグレウスをモフモフ。二人共、私の手にスリスリと身を寄せてくれるところがたまらなく可愛い！

「グータラが大好きなのに全然グータラできてないよねぇ……事件じゃなくて、楽しいことならウエルカムなんだけどな」

『ねぇ、主様。ここを出たら、ガルド達を捜しながら旅をするんでしょ？　どうやって移動する気なの？』

「馬車を買うか、走って行こうと思ってたよ？」

『走るってずっと？』

「グレンもドラゴンだし、体力あるだろうから大丈夫かなって」

『そう……わかったわ。無理はしないでちょうだいね』

「そうだねぇ。もう寝込んだりしたくないから、そんな無理はしないよ。それにしてもシュグタイルハンの王様……アーロンさんの到着早くない？　カリダの街から王都まで魔馬車で十日かかるのに、それとは比較にならないくらい遠い隣の国から来るなら何ヶ月もかかりそうじゃん」

〈王族のみが使える転移門を使ったんだろう〉

「あれ？　グレンおかえり。転移門って？」

〈ただいま。転移門はそのままの意味だ。転移できる門だな。城や古代遺跡などにある。シュグタイルハンは歴史が古いから持っていても不思議はない。転移門は、範囲は限定されるが目的地を自由に決めて飛べるタイプ、飛ばされる場所が固定されているタイプ、飛ばされる場所はランダムで運次第のタイプ、と三種類あると言われている。シュグタイルハンのあやつは転移門で近くまで飛んできたか、直接城に来たんだろう〉

「なるほど。ＲＰＧのあの渦巻きみたいな感じか。王族しか使えないの？」

〈城にあるものは王族限定だと言われているな。許可されたり、王族と一緒だったりすれば使えるかもしれないが……秘匿されているため細かいことまでは我は知らん〉

「そっかぁ。じゃあ私達はやっぱり使えないね」

〈おそらくな。セナ、そろそろメシの時間ではないか？〉

「なるほど。戻ってきた理由がわかったよ。もう作ってあるから、みんなを呼ばないと――」

〈呼んだ！〉

「……早いね」

グレンに苦笑を零したとき、タイミングよくプルトンが魔道具を持って戻ってきた。プルトンから魔道具の説明を受けている間に全員集合。

説明を受けた後はご飯タイムに。今日の夜ご飯はオニオングラタンスープとパンとサラダだ。いつもなら肉じゃないと騒ぐグレンなのに、今日は何も言わずに食べている。珍しいこともあるもんだと思っていたら、〈明日は肉がいい〉とブレないグレンだった。

コテージでの夕食を終えた私達はお城の部屋に戻ってリバーシ。やいのやいのと盛り上がっている。みんな本当にリバーシ好きだねぇ。

（ん？　ブラン団長とトリ……じゃなくてジルベルト君？）

ほど近い場所に二人の気配を察知。二人は私がいるこの部屋に向かってきているらしい。みんなに伝えてリバーシを中断し、テーブルの上を片付ける。

素早いノック音と共に「……セナ、ブランだ。急ぎなんだが、今いいか？」と焦っているのか早口で告げられた。「はーい」とドアを開けた途端、ブラン団長とジルベルト君が滑り込むように部屋へ入室。そのことに驚いている間に、ジルベルト君はドア前で土下座状態に。流れるような動作だった。

「えっと……ジルベルト君、だよね？」

フードを目深に被っているせいで表情が窺い知れないジルベルト君に確認すると、ハッとしてフードを外し、再び頭を下げた。

「大変失礼いたしました。はい、セナ様に名付けていただいたジルベルトです。セナ様……僕なんかのためにありがとうございます」

えっと……どういうこと？　とブラン団長に視線を向ける。視線を受けたブラン団長は困ったように眉尻を下げた。

「……すまない。ト……いや。ジルベルトがどうしてもセナに会って話がしたいと言うから、フー

ドで顔を隠して連れてきた」
「そっか。ブラン団長ありがとう。とりあえず座ろうよ」
なるほど。周りの目があるもんね。老害一族は捕まっているハズだから、「なんでコイツだけ出歩いている！」なんて文句を言われる可能性が高いワケだ。
私の言葉でブラン団長はソファに移動してくれたけど、ジルベルト君は土下座をしたまま、その場から動かない。見かねたグレンが首の後ろ側を掴んで持ち上げ、強引にブラン団長の隣に座らせた。
首根っこって……扱いが猫ちゃんじゃん。
とりあえずどうぞ～と、ラスクと果実水をテーブルに載せておく。
「それで、ジルベルト君はどうしたの？」
〈セナに文句でも言いに来たのか？〉
威圧はしないものの、警戒心を露わにグレンがジルベルト君に問いかける。
「いえっ！　とんでもありません。許される罪ではないと覚悟していたので、本当にいいのかと思う気持ちもありますが……その……あの……」
ジルベルト君はだんだんと小声になり、言いづらそうにモジモジし始めてしまった。
「ん？　なーに？」
〈ハッキリ言え〉
「えっと……あのっ！　僕を連れていってくださいませんか⁉」

「〈「は？」〉」
予想外のセリフに私とグレンとブラン団長の気の抜けた声が揃った。
「僕を救ってくださった、女神様の化身であらせられるセナ様のお役に立ちたいのです」
「いやいや。私は女神様じゃないよ。イチ平民の一般ピーポーだよ」
「ダメでしょうか？」
ショボーンと効果音が付きそうなほど肩を落とし、窺うようにこちらを見てくるジルベルト君。そんな彼にグレンが呆れ顔でため息をついた。
〈ハァ……大体セナの方が強いだろう〉
（グレンさん、まずは女神の化身について否定してくれ……）
「はい。それは重々理解しています。僕も強くなってセナ様の盾くらいにはなれるように粉骨砕身努力していく所存です。以前、セナ様に自由になったら何がしたいかと聞かれた際、セナ様と一緒に旅がしたいと思ったのです。あのときは叶うはずがないと諦めていたのですが……生きることを許され、自由の身となれるのならば、セナ様と共に生きていきたい。……いえ。セナ様にお仕えしたいのです」
（こ、これは……雲行きが怪しいぞ。想定外だわ……）
〈構わず置いていけばいい〉
（それもどうだろう……）
「セナ様が僕なんかとは一緒にいたくないとのことでしたら、セナ様方から離れ、後ろから見守り

ながら付いていきたいと思います」
「いやいや！　それ完全にストーカーだから！」
ずっと心の中でツッコんでたけど、ジルベルト君の発言が衝撃的すぎて思わず叫んでしまった。
無表情なのに捨てられた子犬のような雰囲気を醸(かも)し出すジルベルト君にどうしようかと考える。
この子、こんなキャラだったっけ？　後ろを付いてこられても困る。後ろにいるとなれば気になってしょうがない。本業の冒険者もパーティ組んでることが多いのに、一人ってキツくない？
「私が寝てる夜中に、ジルベルト君とポラルが守ってくれてたのは知ってるけど……」
『気付いてたの？』
「うん。気配が騒がしかったからね。危なそうだったら助けに行こうかと思ってたけど、ポラルは遊んでるみたいだったし、相手の人数も少なかったし、すぐに終わったから大丈夫かなって。数日で刺客っぽいのは来なくなったしね」
〈セナが助けたんだ、どうするかはセナが決めろ〉
「私はジルベルト君が希望する街で暮らしていくためにいろいろ準備してあげるつもりだったんだよ。……うーん……知らないうちにケガされるのも心配だから……わかった。いいよ」
「あっ、ありがとうございますっ！」
「でも！　条件があるの！」
先ほどの無表情から一転、瞳を輝かせたジルベルト君に待ったをかける。
「条件、でございますか？」

「うん。無理そうだと思ったら一緒にはいられない。危険だと判断したら街に残ってもらう。グレンやクラオル達、私の大事な家族も危なくなっちゃうからね。それでもよければになるよ」
「チャンス、ということですね」
「えっと……まぁ、そうかな？」
「かしこまりました。ありがとうございます。セナ様に誠心誠意尽くしたいと思います」
「いや、尽くさなくて大丈夫だから。ジルベルト君の安全第一にして」
「セナ様はやはりお優しいですね。僕のような者の安全を考えてくださるとは。さすが女神様。セナ様をお守りできるよう、精進いたします」
「私、女神じゃないんだけど……」
女神の化身から女神そのものになってるし……
侵入しようとした人から守っていてくれたから、多少は戦えると思うものの、街から出たあとは身体強化で走る予定である。カリダの街で私が身体強化した走りに諜報員が付いてこられなかったことを考えると、私達のスピードに合わせることは難しいだろうなぁ……馬車を買うべき？　でも早々にお別れになる可能性もあるんだよね。どうしようかな……
「……つまり、ト……いや、ジルベルトはセナに付いていくということでいいのか？」
成り行きを見守っていたブラン団長に確認された。ブラン団長、名前変わったのに慣れないんだな。私も間違えそうになるから気を付けないと。
「うん。そういうことになったみたい」

（まさか自己満足のために助けた結果こんな展開になるとは……責任って大事ね。これから気を付けないと。国王に「足元すくわれる」なんて偉そうに言ったけど、人のこと言えないわ）
「……わかった。陛下には俺から伝えておこう。セナはいいのか？」
「ごめんね。お願いします。自分の行動に責任持たなきゃいけないからね。予想外ではあるけど」
「……セナがいいならいいが……ところでセナ。寝ている間に守ってもらった、ということは別の刺客が来ていたということだな？」
ブラン団長は一見、笑みを浮かべているものの、目が笑っていない。これは……確実に怒っていらっしゃる！　笑顔の圧が……！
「えっと……うん。でも犯人わかってるよ？」
「……ハァ。そういう問題じゃない。国賓であるセナが城内で狙われること自体が問題なんだ。この件も俺から報告しておく。ちなみに誰だ？」
「デビト・ワーレス一派に雇われた人だよ」
「またデビト・ワーレスか……他には何かないか？」
「他に何か？　……特にないかな？」
「……本当に何もないんだな？」
めっちゃ怪しまれてる！　とある人物が夜中に近付いてきていたけど、途中で引き返していったし、これは言わないほうがいいと思うんだよね。
「特にないんじゃないかな？　私自身は絡まれてない……っていうか、他の人と接触すらしていないよ。あっちはまだ調べてるけど」
「……そうか。俺達もあっちの件は調べている途中だ。今のところセナの推理通りになっている。あと二、三日もあれば全て調べ終わるだろう」
「おぉ、ありがとう」
「……そうだ、大事なことを伝えていなかった。謁見は明後日（あさって）という話だったが、二日ほど延びそうなんだ」
「あれ？　そうなの？　あらぬ噂を流される～とか言ってなかったっけ？」
「……あぁ。そうなんだが、取り調べで立て続けにトラブルが起きた。悪いが四日後の予定を空（あ）けておいてほしい。大丈夫か？」
「四日後に謁見ってことね。大丈夫だよ」
「……ありがとう。よろしく頼む。さて、もう遅い。俺達は戻ろう。それにジルベルトには話があるからな」
〈我（われ）も話がある〉
立ち上がったブラン団長に続いてグレンまで立ち上がった。二人はアイコンタクトを取り、頷いている。よくわからない私の頭には〝？〟しか浮かばない。
〈先に寝ていろ〉
私の頭を撫でたグレンがブラン団長達と出ていくのを「おやすみなさい」と見送ることになった。
「うーん、グレンどうしたんだろ？」

『放っておいて大丈夫よ。お話ししてくるだけだわ。主様は心配しなくて大丈夫よ』
「大丈夫ならいいけど」
『もう遅いから寝ちゃいましょ』
ほっぺにスリスリと身を寄せたクラオルに促され、私はベッドに入った。

第二話　開かずの間と妖精

クラオルに起こされるまで、夢も見ずに爆睡。いや、爆睡というか寝落ちたというか……
「うーん？　またパパ達かな？」
『何が？』
ベッドに腰掛け、以前疲れているからとパパ達に深い眠りにつかされたことを思い出して呟いた私にクラオルが首を傾げた。
「ううん、なんでもない。グレンは……戻ってきてないみたいだね」
『そうね。今日戻ってくるのかしら？』
「え、そんなに長引くような話なの？　普通の話じゃないの？」
『主様が心配するようなイジメとか、詰問とかじゃないから安心してちょうだい』
「本当？」

『本当よ』
「クラオルが言うなら信じるけど……ご飯どうするんだろう？」
本人に聞いてみようと、グレンに念話を飛ばす。
「((グレンさ～ん。おはよう。朝ご飯どうするー??))」
〈(もうそんな時間か。我(われ)の分は大丈夫だ。昼には戻る))〉
「((無理しないでね？))」
〈((うむ、任せろ！))〉
なんかテンション高くない？　そんな楽しい話なん？　寝てないから変なハイテンションになってるのかね？
首を傾げていると、肩に登ってきたクラオルに頬をチョンチョンとつつかれた。
『どうしたの？　何かあった？』
「いや。なんか〝任せろ！〟ってテンション高く言ってたんだけど、よくわからないし、なんでそんなにテンション高いのかなって」
『寝てなくておかしくなったんじゃない？』
「やっぱそう思う？　戻ってきたらちゃんと休ませよう。とりあえずお昼まで戻ってこないみたいだから、朝ご飯食べちゃおうか」
ベッドから下りて日課を済ませる。今日もプルトンが髪の毛をセットしてくれた。パーティーの日に言っていた通り、本当に毎日セットしてくれるみたい。今日はポニーテールでございます。ズ

ボラな私にはとてもありがたい。
ダイニングに移動し、朝ご飯。グレンがいないなら作らなくてもいいかと、カリダの街で生活していたときのお弁当の残りで済ませちゃった。
朝食後はウェヌスを介して精霊の子達からの報告を受ける。問題の人物達はまだ動き出さないみたい。騎士団が魔法省と老害の家に調べに入ったことで混乱しているらしい。王都に住む貴族全体が事実確認で慌ただしくしているっぽい。
「やっぱ、動きがあるのは謁見で発表されてからかな？」
『聞いている限りだと、その可能性が高そうよね。で、今日はどうするの？』
「この混乱具合だと数日はこのままだろうからなぁ……どうしよっか？　何かしたいことある？」
取っていたメモから顔を上げ、果実水に口を付けつつ考えてみても、特に思い付かない。
『さっき思い出したんだけど、あの廃教会の一番上の鍵のかかった部屋って結局開けてないわよね？　調べなくていいの？』
「あ……そういえばそうだね。忘れてたや」
《何それ？》
そっか。プルトンもエルミスも廃教会については知っているけど、修理が終わった後に契約したから中のことは知らないのか。
前に教会全体の修理をした際、鍵がかかって開けられなかった部屋があったのだと説明すると、《面白そう！》とのこと。

クラオルに『あの教会に行くならグレンも連れていくべきよ』と言われたので、グレンの帰りを待ってお昼ご飯。プルトンがソワソワしていたので、簡単なものってことでＴＫＧ（卵かけご飯）。それとお味噌汁だ。邪道かもしれないけど、私は卵かけご飯に厚削りのかつお節のカスを入れるのが好き。これはクラオルが気に入ったみたいで、いつもより食べていた。ちなみに、肉欲求が激しいグレンにだけは串焼きも出した。
昼食を済ませた私達は呪淵（じゅえん）の森近くの廃教会にやってきた。グレンはやっぱり寝ていないらしいんだけど、大丈夫だからって押し切られたのだ。無理させないようにしないとね。ウェヌスはお仕事のために近くの聖泉から一度精霊の国に戻った。帰りに声をかける予定である。
三階に上がり、問題の部屋を再確認したものの、やはり鍵がかかっていて開かなかった。
「修理のときも鍵は見当たらなかったんだよね。壊すしかないかな？」
《ほう……これは封印魔法がかけられておるな》
「封印魔法？　それってよくないモノを封じ込めているってこと？」
《悪いモノとは限らん。欲深い者なんかは宝石などを自分の所有物としておきたいがために封印して、誰も近付けぬようにしておくヤツもいる》
《封印魔法がかけられているから私達も通り抜けられないけど、嫌な感じはしないわ》
《神による結界の中だし、ここは主（あるじ）の魔力が満ちていて主（あるじ）の支配下だ。仮に悪いモノでも何もできまい》

「え？　私の魔力？　結界石のおかげじゃなくて？」
《主はこの教会を直すのに像だけではなく、全てに魔法を使ったのだろう？》
「うん。それってダメだったの？」
《いや。教会全体に主の魔力が染み込んでいて、儂らにはとても居心地がいい。結界石もそうだが、悪しき者はとてもじゃないが近付けぬだろうな。解除するか？》
「解除できるの？」
《主の魔力を借りられれば可能だ。儂らを手の平の上に乗せてくれ》
エルミスに言われた通り、手の平を上にして両手を出す。それを確認した二人はふわりと手に舞い下りた。二人が何やらブツブツと呟き始めると、ドアに魔法陣が浮かび上がった。
「おぉ～！　ファンタジー!!」
普通に魔法が使える時点で充分ファンタジーなんだけど、イメージのみで使ってるから、光る魔法陣なんて見るとすごく実感する。
魔法陣の光の強さが増していき、パリンッと音がしたと同時に、魔法陣が砕け散った。
《もう開くと思うぞ》
「おぉ、動いた。開けるよ？」
ドアノブが動くことを確認した私の声にみんなが身構える。ゆっくり開いていくと……ものが乱雑に置かれた小部屋だった。倉庫かな？　ホコリが溜まっていて汚い。
「んん？　構えてたわりには特に何もなくない？」

《こっちで倒れてるわよー》
倒れてる？　ものを避けながらプルトンの方へ進むと、執事服を着た子供が倒れているのが目に入った。身長は私と変わらないくらい。幼児である。まさか死っ……!?
「えぇぇ!?　ちょっ!?　あぁ、ビックリした……」
胸が上下していることにホッと息を吐き、とりあえず【ヒール】をかけてあげる。
《ほう。ブラウニーではないか》
「ブラウニーって家に憑く精霊の？　地球でもそうだけど、あれって伝承じゃないの？　この世界でもほとんど見かけなくなってるんだよね？」
パパ達の刷り込み情報ではそんな感じだったハズだ。
《主の世界にもおるのか。この世界のブラウニーは家に憑くというより家人に憑く。それに精霊ではなく妖精だ。主に家人のために家事をこなす。おそらく、ここの前の住人が怪しんで閉じ込めたのだろうな》
《ぅぅ……》
回復魔法をかけたおかげか、はたまた私達の声がうるさかったのか、唸りながら目を覚ました。
「ボク、大丈夫？」
《ぅぅ……へ？　めがみ、さま？》
ブラウニーが呆然とこちらを見て呟いた一言に苦笑が漏れる。どこをどう見てそう思ったの？
「私は女神じゃないよ」

《お主大丈夫か？　現状がわかるか？》
《え、精霊がなんで……現状……あー!》
《思い出せたみたいね》
顔を覗き込むように近付いたエルミスの質問で、ブラウニーは意識がハッキリしたみたい。プルトンがやれやれとため息をついた。
《オレ……いきなり現れて怪しいって閉じ込められたんだ。頑張ってこの教会を維持してたけど、人がいなくなって悪くなる一方だった。憑いていきたかったけど、閉じ込められててどうしようもなかった……》
「そっかぁ。大変だったんだね。もう多分前の住人は死んじゃってるよ。廃教会になって百年以上は経ってるらしいから」
《そんな……オレどうすれば……》
「とりあえずこの部屋、クリーンかけていい？　汚いしホコリがすごいから。封印魔法のせいか、私が教会全体にかけたクリーンが届いてなかったんだね」
『主様……マイペースね……』
クラオルは呆れ声だけど、くしゃみが出そうなくらいホコリっぽいんだもん。私よりクラオル達の方が影響あるでしょ？　【クリーン】を展開すると、息がしやすくなった。
「ふぅ。キレイになった。もうこの教会に住んでる人はいないけど、結界石があるから安全だよ」
《この魔力……》

「ボク聞いてる？　おーい？」
何かブツブツと呟き始めたブラウニーに呼びかける。
《この魔力！　この前感じた澄んだ魔力だ！　お前の魔力だったのか！》
〈お前ではない。セナだ。助けてもらった恩人をお前などと呼ぶな〉
間髪を容れず、グレンが注意した。前から思ってたけど、グレンって意外と真面目だよね。あんなに帰れって言ったのに、契約するためにクラオルに態度を注意されてからはずっと頭下げてたし、たまに子犬みたいだし。忠犬？
「ひとまずこの部屋から移動しようか？　なんかゴチャゴチャ置いてあるから、話すのには不向きじゃない？」
クラオル達も賛成したので、部屋を出たところで全員に【クリーン】をかける。それからブラウニーを連れて応接室へ足を向けた。道中、ブラウニーはキョロキョロと見回しては《おぉ！》《これは！》なんて言いながら付いてきた。ソファに座ったブラウニーに果実水を出し、本題に入る。
「さて、ボクはこれからどうするの？」
《オレは……》
《普通ならば家人に憑き、家人が死ぬときに血縁者に憑くか離れるか選択するが、こやつは封印されておった故、何もできなかったのだろうな》
言い淀むブラウニーを見たエルミスが教えてくれる。
「なるほど。このままだとどうなるの？」

《ふむ。封印を解いた故、自由の身となったが、憑く人がいなければ探すしかないな》
「あら。じゃあ街で憑く人探す？」
《オレ……オレはこの教会が好きだから離れたくない》
ブラウニーの言葉を聞いてみんなで顔を見合わせる。
「うーん……でもここ住む人いないんだよね。人じゃなくて家に憑くなら大丈夫だと思うけど」
《女神様が住んでるんじゃないのか？》
「女神？　イグ姐？　パナーテル様？　どっちも神界だよ？」
『多分主様のことよ。さっき言ってたじゃない』
クラオルに指摘されてから、そういえばと思い出した。
「私は女神じゃないし、ここに住んでもいないよ。パパ達に頼まれてこの教会の修理はしたけど」
《女神じゃない？　修理しただけ？》
「そう。私は冒険者だから家はないんだよ。基本宿屋に泊まってるの」
《ここの管理は主であろう？　契約してこやつだけここにいればいいのではないか？　主が言っていた迷子やケガ人が来てもこやつなら応対できるであろう》
《それがいい！　オレ頑張ってここ維持していく！》
「まぁ、来た人の応対をしてくれて、一人で生活できるなら別に構わないけど……ここ、パパ達の結界が張ってあるから、維持は頑張らなくても大丈夫だと思うよ？」
《本当か!?　さすが女神様だ！》

「だから私は女神じゃないって。ただの一般人。ご飯とかはどうするの？」
《オレは魔力で生きてる。食べ物は特に必要ない。簡単なものなら作れるし、薬草使ったケガの治療もできるぞ！》
「じゃあいいかな？　ここで生活したいなら、迷子の人やケガ人にご飯を食べさせて、治療してあげること。それを約束できるなら契約してあげるよ」
《本当か!?　やっぱり女神様だ！》
「だから私は女神じゃないって……契約って名前付けるの？」
　確認のためにエルミスに視線を向けると、頷いた。
《そうだ。名付ければ契約は完了となる》
「名前ねぇ……一番悩むんだよなぁ。うーん……キヒターは？」
《キヒター！　オレの名前キヒター！》
　ブラウニーが嬉しそうに自分の名前を叫んだ瞬間、彼がピカーッと光った。無事に契約できたみたい。光が収まると、そこには執事服を着た中学生くらいの男の子がいた。
「……え、どちらさま？」
《主（あるじ）の魔力で成長したようだな》
「えぇ!?　成長するの!?」
《オレ、女神様のために頑張ります！》
「しかもさっきと言葉遣い変わってない？」

《おそらく成長したからだ。契約もせずずっと閉じ込められていた故（ゆえ）、子供から成長できなかったのであろう。主（あるじ）の魔力でここまで一気に成長するとは……面白いな》
「一気に成長して弊害みたいなのはないの？」
《大丈夫です！》
「ならいいけど……私は女神じゃなくてセナだよ」
《オレにとっては女神様です！　精一杯頑張りますのでよろしくお願いします！》
　女神呼びは直す気がないらしい。ニコニコしながら頭を下げられた。執事服まで一緒に成長したことに驚きを隠せないものの、なんでもありなこの状況に疲れてきていた私は考えることを放棄した。考えるな、感じろ！　ってやつだよ。
　この教会は精霊達が気に入っているあの聖泉からほど近い。そのため、ウェヌスにも話を通しておいた方がいいだろうとお呼び出し。それぞれの自己紹介を終え、キヒターに教会内を案内する。
「食材はキッチンの倉庫にあるから、作るときはそれ使って。劣化しない倉庫にしておいたから、腐ることはないと思う」
《わぁ！　さすが女神様！　ありがとうございます！》
『きっと言っても無駄ね……』
　私の気持ちを代弁するかのようにクラオルが呟いた。そうだね。女神呼びを直す気配がないよね。
　他に何か必要なものがあるか聞いたところ特に思い付かないそうなので、近々様子を見に来る約束をして廃教会を後に。キヒターは手をブンブンと振り、私達が転移で去る最後の瞬間まで満面の

笑みで見送っていた。
もう、廃教会とは呼べないよねぇ。なんて呼べばいい？　わかりやすくキヒターの教会でいいかな？

◇　◆　◇

翌日、私はプルトンを誘ってコテージの錬金部屋にいた。
「キヒター用に結界の魔道具作りたいんだよね。契約したから念話はできると思うんだけど……できるよね？」
《多分できるでしょうけど……わからないから確認した方がいいと思うわ》
二人して不安になったので、キヒターに念話を飛ばしてみる。
「((キヒター、聞こえる？))」
《((女神様⁉　聞こえます！))》
「((女神様じゃないって……必要なものとか欲しいものとか、何か思い付いた？))」
《((ポーションとか、傷を保護する包帯とかがあったらいいなと思いました))》
「((わかった。持っていくね。何かあったら、ちゃんとこうして連絡してね))」
《((女神様……ありがとうございます！))》
キヒターとの念話を終わらせてため息をつくと、プルトンに不思議そうな顔を向けられた。

「念話はできたんだけど、何回言っても女神様呼びをやめてくれないんだよ」
《なるほどね。いいんじゃない？　セナちゃんが助けてあげて、廃教会を直したんだもの。あの子にとっては女神同然なのよ》
「廃教会は直したけど、結界はパパ達だし、助けたって言ったって、封印解除したのはエルミスとプルトンだよ？」
《うふふっ。私達もセナちゃんと一緒じゃなかったらあの廃教会に行ってないし、神様達でもどうしようもなかったんだからいいのよ。それにあの廃教会にそうそう人が来るとは思えないもの》
「それはそうかもしれないけど……あそこに一人って寂しくないのかね？」
《自分で離れたくないって言ってたんだから大丈夫よ。それにセナちゃんと契約して、ちゃんと繋がりもあることだしね》
「大丈夫ならいいんだけど。たまに会いに行ってあげないとだね」
《ふふっ。それで充分だと思うわ》
「じゃあ、キヒターの安全のために魔道具作ろう。結界だとネックレスがいいかな？」
《そうね、ネックレスがいいと思う！》
プルトンに手伝ってもらい、ああでもないこうでもないと相談しつつ作っていくと、思っていたよりも早く出来上がった。前にもネックレスを作っていたのがよかったのかもしれない。デザインはクラオルマークにした。我ながら可愛い。
《さすがセナちゃんね。あの教会にいたらそうそう危険はないだろうけど、これなら安全！》

プルトンからお墨付きがもらえたなら本当に大丈夫なんだろう。ブラン団長達用に作ったやつより、間違いなく強力だよ。

午後はゴンドラ商会に救急用品を買いに来た。念話でキヒターに言われたやつね。

ポーションは前に作った分があるので、包帯やガーゼのようなもの。骨折した人が来るかもしれないから、吊るす用に三角巾。湿布や絆創膏はなかった。あったら便利なのに！

案内してくれたお姉さんに聞くと、基本的にはポーションで大抵の傷は治ってしまうため、こういった救急用品自体、あんまり買う人がいないんだって。買っていくのはヒーラーと組んでいない冒険者や小さい子供くらい。お金さえ払えば、教会で軽いヒールをかけてもらえるらしい。

ゴンドラ商会を出た私達はお城の部屋に戻り、そこからキヒターの教会まで転移で飛ぶ。

一発成功したことにほっと胸を撫で下ろした瞬間、教会のドアからキヒターが《女神様ー！》と勢いよく飛び出してきた。

《おかえりなさい！》

「ビックリした……えっと、ただいま？　お迎えありがとう。救急用品持ってきたよ」

私、住んでるワケじゃないんだけど。それにしても驚いたわ。誰も一言も喋ってないのに、よくわかったね。気配かな？

《驚かせてすみません。ありがとうございます。さぁ、どうぞお入りください！》

「あ、うん」

ニコニコ顔のキヒターに促され、中に入る。

「はい。これが救急用品。あと、何かあったときのためにこのネックレス着けててね」

《わぁ！　ありがとうございます！》

「魔物とか冒険者に襲われたり、教会に異常が生じたり……少しでも危険だって思うことがあったら、それに魔力を流して私に連絡して」

《はい！》

キヒターはネックレスを早速首に着けて嬉しそうにしている。本当にわかってるのかな？

《そうだ！　女神様は薬草使いますか？》

「薬草はポーションを作るのに使ってるよ」

《いっぱい採ってきたのでよかったらどうぞ！》

手を引かれ、案内されたのはキッチンの倉庫。中を見てみると、大量の薬草とハーブで私が置いた野菜が埋もれていた。

「これどうしたの？」

《近くの森で採ってきました！　女神様が使うかなって。女神様がいらなかったら教会に来た人に使えばいいかと思ったので！》

「なるほど……それにしてもすごい量採ってきたね……」

《教会の裏で薬草とハーブを育てようと思っていっぱい採ってきました！》

「育てるの？」
《はい！　いつも女神様に持ってきてもらうのは大変だと思ったので。オレ、植物育てるの得意なんです！》
「もう畑ってできてるの？」
《今作っている途中です！》
一応シャベルとかバケツとかは教会に置いてあるけど、一人で畑を作るのは大変だろう。
「そっか。よし！　あの食材置き場にしまうと食材が埋もれちゃうから、もう一つの物置を薬草とかハーブを置く場所に変えちゃおう。プルトンはまた魔道具作るのを手伝ってもらってもいい？」
《任せて》
「クラオル達はキヒターを手伝ってあげてくれる？」
『いいわよ』
「ありがとう！」
みんなにお願いしてから物置に向かい、設置する棚のサイズを測る。メジャーなんかないから紐と歩幅で。測ったらコテージで以前作った魔石と同じものを作る。魔石ができたら木をカット。収納用の箱も作り、鉱石から棚受けのアイアンブラケットと釘も作った。直角にするのが難しくて、こういう作業は炉を使った方が早そうだと実感した。
「ちょっと歪（いびつ）な気がするけど、とりあえずはいいかな？　炉が扱えるようになったら作り直してもいいもんね。忘れちゃいそうだけど。……まぁ、壊れたり不具合が出たりしたらでいいか」

教会に戻った私はみんなに声をかけた。前回の倉庫と同じように魔石を天井に埋め込み、手伝ってもらって棚を取り付ける。みんな優秀で素晴らしい！
「とりあえず完成～!!　みんなありがとう！」
《さすが女神様、すごいです！　早速薬草を移動させます！》
キヒターがルンルンと箱を持ち、キッチンの倉庫に向かっていった。
「畑、完成した？」
〈できた。あとはキヒター次第だ。撫でてもいいぞ〉
「ふふっ。ありがとうね」
私の身長に合わせてしゃがみ、頭を向けてくるグレンを撫でてあげる。それを見ていたメンバーも寄ってきたので、結局全員撫でることになった。

第三話　種族と従魔

朝食を食べ終わったタイミングで、ブラン団長がグレンを呼びに来た。ジルベルト君のことでグレンに用があるって連れていっちゃった。
「あっちはまだ動かなそうなんだよね。みんなは今日何したい？」
『あ、そうそう。ガイア様から教会に来てほしいって伝言があったのよ』

「そういえば王都に来てから教会に行ってないね。コテージでも会わないから忙しいのかと思ってた」
『行けば理由がわかるわ』
「ん？　理由？？　よくわかんないけど、とりあえず行ってみようか。送ってくれた食材のお礼と、コテージの改装のお礼も言わなきゃだし、会えるならみんなを紹介したいしね」
《あら！　私達を紹介してくれるの？》
「もちろんだよ。グレンはいないけどウェヌスもいるしね」
《ありがとうございます》
プルトンは嬉しさのあまりエルミスに《神に紹介なんて緊張するわね！》なんて絡み始め、絡まれたエルミスは満足そうに頷いて、ウェヌスは顔を赤くして照れていた。
「善は急げってことで、早速行こうか。ポラルくっ付いて～」
〔ハイ〕
グレンには教会に向かうことを念話で伝え、お城を出る。マップで検索した結果、教会は貴族エリアに二つ、平民エリアに四つあるらしい。選べるなら平民エリアの方に行きたい。お祈りの最中に「何故平民がいるのかしら？」とか「平民がいると思うと気分が悪いわ。慰謝料を払いなさい」なんて言われたくないし、貴族の高笑いなんかも聞きたくない。自分の勝手な想像でゲンナリ。平民エリアにあるうちの一つが商業ギルドから割と近い場所にあるみたいだからそこに向かおう。
「((貴族エリアなのに地味に人が多くて身体強化が使えないから、転移するよ))」

走りながら反復横跳びなんてしたくない私は念話でみんなに声をかけ、路地に入ったところで周りを確認し、転移を行使。商業ギルド裏の細い路地に飛んだ。
「ふぅ。街中って見られたらマズイから余計に緊張するよね。こういうとき、グレンのありがたみを実感するわ」
『ふふっ。グレンに言ったら調子に乗りそうね』
「それも可愛いじゃん」
『古代龍（エンシェントドラゴン）を可愛いなんて言えるのは主様くらいよ』
「そうかなぁ？　グレンって性格が可愛くない？　頼んだらなんでも手伝ってくれるし、撫でられたがるんだよ？　あのビッグサイズのドラゴン姿のときは可愛いよりカッコイイの方だと思うけど」
セカセカと歩きつつ喋っていると、教会に到着。カリダの街の教会よりこぢんまりとしていて、アットホームな雰囲気。騒がしくはないものの、何人も住民がお祈りに来ていた。中は全体的に明るく、並んでいるベンチに座ってお祈りするみたい。
（なるほど。ここは像の目の前でお祈りするわけじゃないのか）
他の人に倣（なら）ってベンチに腰掛け、小さく柏手（かしわで）を打って目を閉じる。
（ガイ兄（にい）～！）
「待ってたよ」
声が聞こえ、視線を上げるとガイ兄（にい）がニコニコの笑顔でいつもの花畑に立っていた。

「久しぶり～！」
駆け寄った私がガイ兄の足に抱き付くと頭を撫でられた。
「パパ達とイグ姐は？　忙しいの？」
「ふふふっ。いじけているんだよ」
「いじけてる？」
「そう。とりあえずいつもの場所に移動しようか？」
私と手を繋いだガイ兄が指をパチンと鳴らす。瞬きをする間に、お馴染みになっているリビングみたいな部屋へと移動していた。
「とりあえず座って待っていようか？　すぐに来ると思うから」
「はーい」
「待っている間のおやつが必要だね。うーん……これがいいかな？」
ガイ兄の指パッチンでテーブルの上に現れたのは、温かいお茶が入った湯呑と、おかきが入ったお皿。
「おぉ！　おかきとお煎餅だぁぁ！　これ食べてもいいの⁉」
「ククッ。もちろん食べて大丈夫だよ。おかわりもあるから安心して」
「やった！　早速いただきます……ん～！　美味しい……幸せ……」
あまりの美味しさにクラオル達にも渡してパクパクと口に運ぶ。
「ククッ。そんなに喜んでもらえると嬉しいよ」

「ん⁉　このお茶、ほうじ茶じゃん」
「セナさんは温かいお茶は緑茶よりほうじ茶が好きだと日本の神に聞いたからね」
「そうなの。ありがとう。めっちゃ嬉しいし美味しい！」
ヤバい。久しぶりに食べると止まらない。美味しすぎる……！
「うーん、みんな遅いね。そうだな……セナさん。〝せっかく来たのに会えないパパ達は嫌い〟って言ってもらえるかな？　〝パパ達よりガイ兄が好き〟でも構わないよ」
「んん？」
笑顔でいきなり何を言うのかと、おかきを持ったまま首を傾げる。
「言ってみて」
「せっかく来たのに会えないパパ達は嫌い？」
促されて言葉にしたものの、意図がわからなくて疑問形になってしまった。
「「セナ（さん）！」」
「うぐっ⁉　ゴホッゴホッ……」
『え、主様大丈夫⁉　このお茶飲んで！』
座っているソファ横にパパ達とイグ姐がいきなり現れ、驚きのあまりおかきが変なところに入ってしまった。ゲホゲホと噎せながらクラオルが草魔法の蔓で渡してくれたお茶を受け取る。
「……ふぅ。ビックリした。クラオルありがとう」
「驚かせてごめんなさい」

「セナは俺達が嫌いなのか⁉　だから教会に来たとき、ガイアのことだけ呼んだのか⁉」
ショボーンと肩を落とすエアリルパパの横から、アクエスパパが詰め寄ってくる。
「へ？」
「さっき言っていただろう？」
「……あぁ！　違うよ。あれはガイ兄に言ってみてって言われたんだよ。教会でガイ兄だけ呼んだのは、クラオルからガイ兄が呼んでるって聞いていたから」
「ガイア！　冗談が過ぎるぞ！」
「みんながさっさと来ないのがいけないんだよ。セナさんを待たせた罰だね」
「ぐっ……」
ガイ兄とアクエスパパの争いはガイ兄に軍配が上がったらしい。そもそもなんの争いなのかよくわからないんだけどさ。
「三人共久しぶりだね～」
「セナさん……怒ってないんですか？」
「んん？　怒るって何に⁇」
子犬のようなウルウルの瞳のエアリルパパを可愛いなぁと思いつつ、心当たりがなくて首を傾げる。
「あの廃教会を直したとき、パナーテル様が神力を使っただろ？　あのときセナは怒っていたからな……」

私の疑問に答えてくれたのはアクエスパパ。とても気まずそうに目線を逸らされた。
「そんなこと？　あれってパパ達関係なくて、パナーテル様が勝手にやったんじゃないの？」
「そうだ！　俺達は知らなかった……」
勢いよく反応したアクエスパパは手が白くなるほど拳を握っている。
「すぐに怒りに行ったんだよ。セナさんを危険に晒すなんて言語道断だからね」
ガイ兄はガイ兄で笑顔なのに〝言語道断〟に力が入ってるし……
「あれから教会に来てもらえなかったので、てっきり僕達にも怒っているのかと……」
「なんでパパ達に怒るの？　パナーテル様に怒ったとしてもパパ達は悪くないじゃん。コテージで会わなかったから、忙しいのかと思ってた」
「うぅぅ……セナさーん！」
（うおっ！）
ソファに座っている私目がけ、エアリルパパが突っ込んできた。ギュウギュウと抱きしめてくる。いつものポジションにいたクラオル、グレウス、ポラルは瞬時に避難したらしい。状況判断が素晴らしく早い。ヨシヨシとエアリルパパの頭を撫でてあげたら、腕の力がギュンと増した。
「ぅっ……パパ、さすがにちょっと苦しい……」
「わわっ！　ごめんなさい！　大丈夫ですか？」
慌てて離れ、ペタペタと確認してくるエアリルパパに笑ってしまう。ケガするまでは至ってないから大丈夫だよ。

「では、セナは怒っていたワケではないんだな？」
「うん。討伐隊の一件でバタバタしてたし、教会の修理が終わって特に用がなかったから行かなかっただけ」
「そうか、よかった……」
「妾達の勘違いだったんじゃな」
アクエスパパの確認に答えると、アクエスパパとイグ姐は揃ってホッとした様子だった。
「報告に行けばよかったね。ごめんね」
「よいよい。妾達が勝手に勘違いしただけじゃからな」
「誤解も解けたことだし、座ったらどうかな？」
ガイ兄に促され、ガイ兄の隣にイグ姐、パパ二人は私を挟むように座った。心なしか、いつもよりパパ達にピッタリくっ付かれている気がする。
「あ、そうだ。アクエスパパとガイ兄、お魚と木ありがとう。とっても助かったよ」
「セナが欲しがっていた魚がわからなかったから、ひとまず何種類も送ったんだが、合っていたみたいだな」
「喜んでもらえて嬉しいよ」
「早速コルクをポーションの蓋にして、お魚は食べたよ。美味しかった～。あと、コテージも作業部屋と客室が増えてた。パパ達がやってくれたんだよね？　みんなありがとう」
「製作をする部屋を増やした際に二階も広くなったから、個室を増やしたんじゃ。セナの笑顔が見

られて嬉しいのぉ」
「これは私達が着けてていいのかな？」
そう言ったガイ兄が手の平の上に出したのは、私が作ったコイン型ネックレスだった。
「あ、それ、日頃のお礼にって思ったんだけど、いらなかった？　ごめんね」
「違う違う。誤解しないで。これが棚に入っていたとき、エアリルが『最後の贈り物かもしれない！』って騒いでいてね。最後は嫌だから着けてなかったんだよ」
「なるほど。初めてまともに作るモノはパパ達に……と思ってたんだけど、好みじゃなかったら捨てちゃって大丈夫だよ」
「そんなことはありえません！」
「！」
いきなり隣から大声で否定されて肩が跳ねる。
「セナがそんな風に想って作ってくれたものを俺達が捨てるわけないだろ？」
「そうです！　せっかくセナさんが僕達にプレゼントしてくれたものですよ!?　宝物にするんですから！」
「そ、そう？　大丈夫ならいいんだけど……」
鼻息荒く力説するエアリルパパの圧がすごい。
みんなこの場で着けてくれることに。着けた瞬間、ポワァっとネックレスのコインが光ったことに目を剥く。

え!?　なんで光った!?
「「「これは……」」」
「何!?　なんか変？　大丈夫なの??」
「いや……癒されるな」
「……へ？」
アクエスパパのセリフが一瞬理解できなかった。癒されるって言った？
「ふふふっ、この魔道具は癒しの効果があるみたいだね」
「え……魔道具じゃなくて、ただのアクセサリーのつもりで作ったんだけど……」
「おそらくになるが、セナの想いと魔力がたっぷりと込められておるからじゃろうな」
「私達にはとても嬉しいプレゼントだよ」
「えっと……喜んでくれたのならよかった、のかな？」
「セナさんからのプレゼントですよ？　喜ばないわけないです！」
「あ、うん。……喜んでもらえて嬉しいです」
ズイッと顔を寄せられ、軽くのけ反る。エアリルパパの圧アゲインである。私が反射的に返した言葉を聞いて、ニコニコと元の体勢に戻ったから、正解だったんだろう。
そこまで気に入るようなものでもないと思うんだけど……光った理由もわかんないままだ。まぁ、大丈夫みたいだし、喜んでくれてるから気にしなくていいかな。
「そうそう。遅くなっちゃったけど、紹介するね。この可愛い子がグレウス、青い精霊がエルミス、黒い精霊がプルトン、光の精霊がウェヌス、蜘蛛のポラルだよ。あと、今は別行動になってる古代龍（エンシェントドラゴン）のグレンと、つい一昨日（おととい）契約することになった妖精のキヒターもいるよ」
『グ、グレウスです。よろしくお願いしますっ』
グレウスが緊張の面持ちで挨拶したのを皮切りに、精霊達とポラルも自己紹介。ここでの驚きは精霊達全員が声を揃えて《よろしくお願い申し上げます》と、改まった敬語になっていたこと。やっぱ相手が神様だからかね？
「うむうむ。見ておったが、ちゃんとセナの役に立っておるようじゃの」
「これからも僕達のセナさんをよろしくお願いしますね」
『はいっ！』
《御意に》
〔ハイ〕
精霊で声を出したのはウェヌスだけだったけど、エルミスもプルトンも片手を胸に当て、頭を下げていた。三人の揃った仕草がちょっと執事っぽくてカッコイイ。ガイ兄（にい）は「うんうん、素直でいいね」なんて言っていた。
「そういえば、あの不快なゴミ達はお仕置きしたから安心していいぞ」
「んん？　不快なゴミ？」
アクエスパパの発言に首を傾げる。
「セナのことを愛妾（あいしょう）にするなどとぬかしおったやつじゃ」

「あぁー、カリダの街の領主？」
「そうじゃ！　妾達の可愛い可愛いセナに無礼極まりないからの、呪いをかけてやった」
「呪い!?」
「当然だろ？　ついでにスキルや魔法の類も一切使えなくしておいたから安心していいぞ」
「えぇ!?」
「本当はもっと早く罰を与えたかったんですけど、セナさんのために騎士団が頑張って調べていたので見守っていたんです。不快な思いをさせてしまってすみません」
「あの兎族がよう調べておったの」
　騎士団の兎族……パブロさんかな？　それにしても呪いって……
「あのゴミが宣言したとき、アクエスもエアリルもイグニスもブチ切れ寸前で、止めるのが大変だったんだよ」
「ま、まさか……あのときの雷雨ってパパ達が原因？」
「俺達のセナが愛妾なんて言われたんだ、怒るのも当たり前だろ？」
　疲れたように口にするガイ兄に確認したら、アクエスパパがフンッと鼻を鳴らして得意げに言い放った。
　マジか……がっつりパパ達のせいだったのね。そして当たり前ではないと思うよ？
「他にも、セナさんをジロジロと見ていて不快だったので、あの冒険者パーティや問題を起こした騎士団の隊員にもスキルなどの魔力使用を禁止にした上、毎日悪夢にうなされるようにしておきました」
　ニッコリとエアリルパパが宣言。
「えっと……ありがとう？」
（そこまでしなくても、犯罪奴隷にされているのに……第一騎士団の他のメンバーは平民にされたんだっけ？　確かブラン団長が冒険者になるしかないって言ってたけど、スキル使えないって厳しくない？）
「セナの安全を脅かす奴は許せないからな」
　私の頭を撫でながら微笑むアクエスパパ。笑顔で怖いこと言わないでほしい。
「もしかして……王都に来る途中、魔物に一切遭遇しなかったのもパパ達が何かした？」
「そうだ。セナが病み上がりだったからな。魔物が出たらセナは索敵したり、戦ったりとゆっくりできないだろ？」
「なるほど。野営のときも森で採取したときも一切気配がなかったもんね。納得。ありがとう」
「セナさんが喜んでくれると僕達も嬉しいです！」
「それと今回の件もじゃな」
「今回？」
「城でいろいろとあったじゃろ？」
「あぁ！　……って、どれ？」
　心当たりが多すぎてまたも首を傾げる。

「まず、セナさんが〝ボクちん〟と〝ギラギラおばさん〟って呼んでた二人だね」
「まず？」
「そう。まず。この〝ボクちん〟は元々なんも才能もないのに努力もしないから一人じゃ生きられないんだけど、こいつは悪夢を見るようにしておいたよ。どんなに眠りたくなくても時間がきたら眠りに落ちて悪夢を見るんだ。次に〝ギラギラおばさん〟だけど、そもそもの全ての原因がこいつだからね。魔法やスキルを使えなくさせることはもちろん、魅力をマイナスにして全ての者から嫌われるように。そして、見た目の加齢を加速させたんだ。あとはオマケで私達の呪いも付けたよ」
ガイ兄は爽やかな笑顔で、どぎつい説明をしてくる。
「うわぁ……また一段とあの人に堪えそうな罰だね……」
「堪えないと罰にならないからね。でも、おかしくなることもできないようにしているし、むしろ長生きすると思うよ」
（うひぃ……えげつないな……）
「あとセナが〝クソジジイ〟や〝老害〟と言っておったやつじゃの。こやつは利用すればいいとセナが助言したことで、牢に繋がれたまま生かされておるんじゃが、隷属の首輪を破壊できないようにしておいたからの。セナの魔道具で魔力が使えぬが、暗殺者がきたときなんかに殺されたら困るじゃろうし、そういうときだけは例外的に魔法を使えるようにした」
「おぉ！　それは多分ブラン団長が喜んでくれると思う。ありがとう」
「うむ。だが、それでは罰にならないからな。やつには〝ギラギラおばさん〟が今までしてきたこと、自分がしてきた行いを眠るたびに見せている。こちらもおかしくならないようにしているから、情報が聞けないなんてことはないぞ！」
イグ姐の説明をアクエスパパが引き継いでテンション高く締めくくった。
「それまたすごい罰だね……」
神様達を怒らせたらヤバいじゃんか……
「残るはこの〝老害〟に命令されてた人達ですね。更生できそうな人は軽めに、心が悪に染まっている人は厳重な罰にしました。ただ、心が壊れちゃってる人が多くて……その人達は安らかに眠るように順番に息を引き取らせています。幸せになれるであろう、愛に溢れる方々の子供として転生させる予定です」
「そっか……新しい人生を歩み始められるんだね。でもそんなことして大丈夫なの？」
「俺達がここまで関与したのは初めてだ。生きている者全てに俺達が関わればバランスが崩れる。転生先などは普段、自然に割り振られるようになっている。悪しき者は苦労するように、善き者はよき人生が送れるように、な。この世界は善き者と悪しき者がいてバランスが保たれている。こやつらはセナが関わらなければ死ぬまで酷使されていただろう。しかし、セナが関わったおかげで次の人生は自分次第で幸せを掴めることになったんだ、セナが気にする必要はない」
「ありがとう。次は幸せだなって思える人生を送れるといいな」
「そうだな」
私を抱き寄せ、頭を撫でるアクエスパパの顔は穏やかだ。

立ち読みサンプルはここまで

「あ！　まだ他にもいたね」
ちょっとしんみりしたところで、ガイ兄がポンッと手を打った。
「他にも？」
「セナさんはこれから捕まえる気でしょ？」
「あぁ……うん」
「すぐに神罰を与えてもよかったんだけど、セナさんが捕まえるまで待つことにしたんだ。捕まえたらちゃんと罰を与えるから安心してね」
「あやつも不快じゃからな！　妾達がしっかりと罰を科すからの」
「わぉ……ありがとう。被害者も浮かばれると思う」
内容は……聞かないでおこう。
「ふむ。自分ではなく他者を思いやるとは相変わらずセナは優しいのぅ」
しみじみと発言したイグ姐に同調するかのように、みんな頷いている。
別に優しいワケじゃないんだけどな……ツッコんだらさらに言われそうだ。話題を変えねば。
「ねぇ、あんまり関わっちゃいけないって言ってたけど、私はいいの？」
「セナは特別だからな！」
いやいや、答えになってないよ！　とアクエスパパをジト目で見る。
「今日はそのことでクラオルに頼んで来てもらったんだよ」
ガイ兄のセリフに首を傾げる。

「セナさんは種族が〝神人〟でしょう？」
「うん。ステータスだとそうなってたよ」
「神人は普通の人間とはちょっと違うんだよ。私達神の力を少し受け継いでいるんだ。ただ、生きるのに必要な食事や睡眠などは人間と変わらない。セナさんは魔力拡張もしたから長生きになるし、努力次第では私達神に匹敵するくらいになれると思うけれどね」
「僕達が体を作ったので神人となりました。僕達が作ると神の力が宿るため、どうしてもそうなってしまうんです。僕達の力を引き継いでいるおかげで、僕達が関わっても大丈夫なんですよ」
「あぁ……本来この世界のモノじゃないからか」
ガイ兄とエアリルパパからの説明で納得。私の大元の魂は日本産だもんね。
「……はい。嫌ですか？」
「ううん、全然嫌じゃないよ。パパ達のおかげでいっぱい助かってるもん。ただ、私だけ特別扱いでいいのかな？　とは思う」
「セナは本来違う世界で天寿を全うするはずだったところを俺達のミスでこちらに来たからな。気にしなくていい」
「むしろセナが来てくれたおかげで楽しいからのぅ。もっとワガママ言ってもいいんじゃぞ？」
「ふふっ。ここまで関わりたいと思った人は初めてだからね、セナさんは気にしなくて大丈夫だよ。それにセナさんも私達にいろいろしてくれているでしょう？」
「本当に気にしないでください。セナさんが僕達と距離を置くなんて悲しすぎます」